

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和2年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第11号（2月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081（代表）

099-245-1157（直通）

099-245-1149（FAX）

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jppn.ne.jp/kagoshima>



メールアドレス：nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp

農薬の安全使用に努めましょう

農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理，安全使用
2. 作物に対する安全 適期，適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止
(周辺住民等への危被害防止)
(河川，湖沼，海などへの汚染防止)
(養蚕，養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

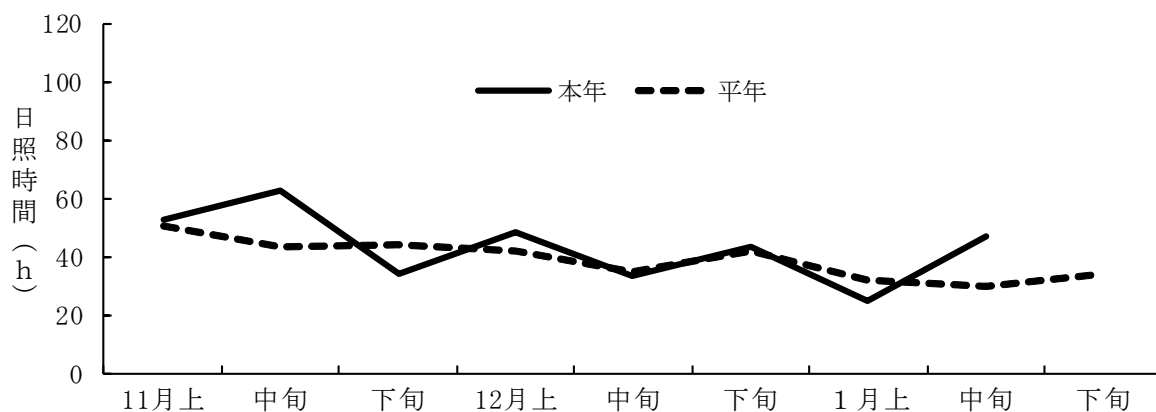
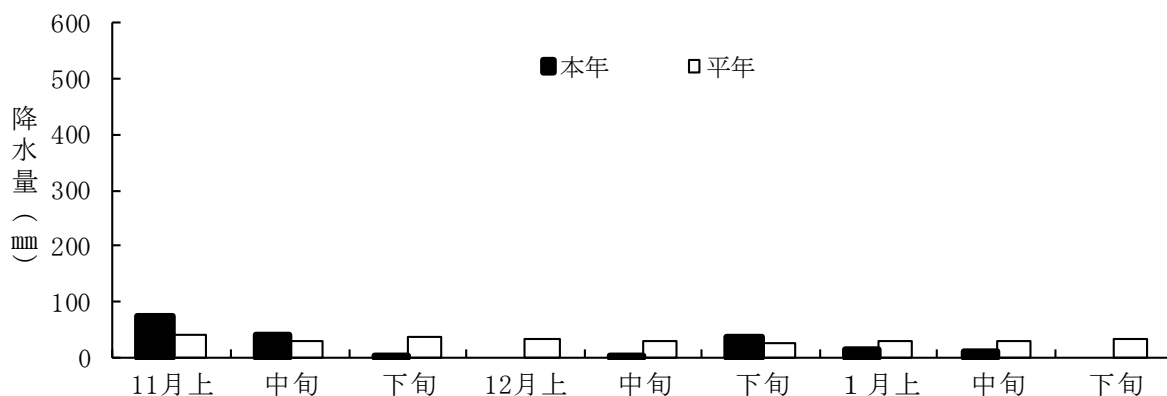
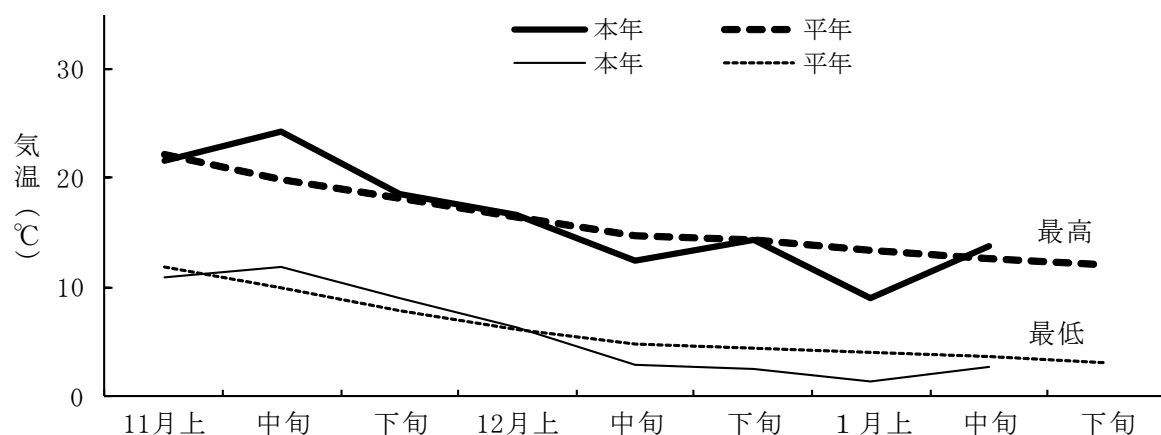
農薬ラベルを確認しましょう。
農薬の飛散（ドリフト）にも注意しましょう。

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（1月30日から2月28日） 令和3年1月28日 鹿児島地方気象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	10	30	60	九州南部では、気温は高く、降水量、日照時間はおおむね平年並みの見込み。 奄美地方では、気温は高く、降水量は少なく、日照時間は多い見込み。
	奄美地方	20	30	50	
降水量	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	50	30	20	
日照時間	九州南部	30	30	40	
	奄美地方	20	30	50	

II. 11～1月の気象情報（鹿児島地方気象台 観測点：加世田）



【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	べと病	並	やや多
		退緑黄化病	やや多	やや多
		黄化えそ病	やや多	やや多
	トマト	疫病	やや少	並
	ピーマン	斑点病	並	やや多
		うどんこ病	少	やや少
		アザミウマ類	やや少	並
	イチゴ	アザミウマ類	やや多	多
		ハダニ類	多	多
	施設野菜共通	菌核病	やや多	多
	エンドウ類	うどんこ病	やや多	やや多
		ハモグリバエ類	並	並
		アザミウマ類	並	並
	バレイショ	疫病（熊毛地域）	やや多	多
		〃（奄美地域）	やや少	並
軟腐病（奄美地域）		並	やや多	

【 病 害 虫 発 生 予 報 】

I. 野 菜

1. キュウリ

(1) ベと病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

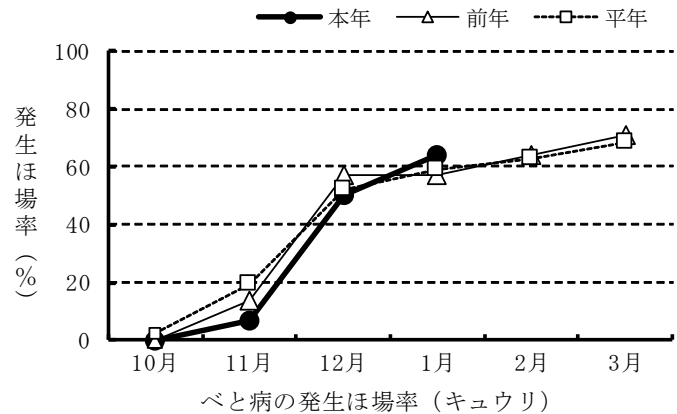
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率64%（平年59%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウスの通風換気に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、伝染源となるためハウス外に持ち出して処分する。
- (ウ) 肥料切れや草勢の衰えは発生を助長するので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、発生初期の防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) 退緑黄化病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

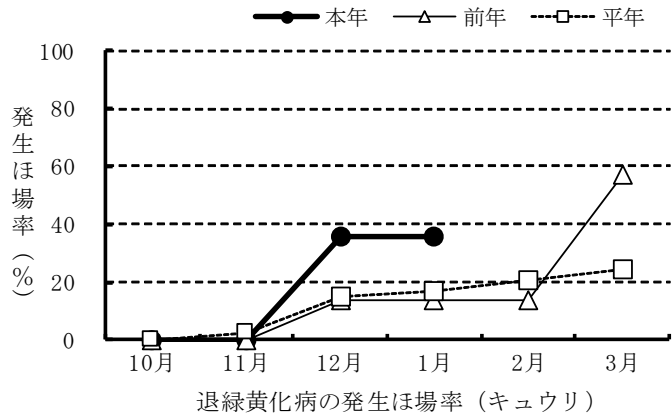
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率36%（平年17%）
：やや高い（+）

コナジラミ類の

発生ほ場率21%（平年25%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 退緑黄化病の病原ウイルスはタバココナジラミに媒介される。ハウス開口部（サイド等）等に黄色粘着トラップを設置し、タバココナジラミの早期発見，早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ビニール袋等に入れて適正に処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、タバココナジラミの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) 黄化えそ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

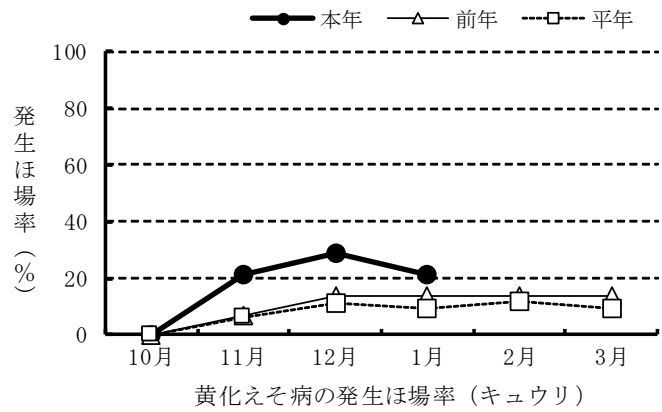
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率21%（平年9%）
：やや高い（+）

アザミウマ類の

発生ほ場率7%（平年8%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 黄化えそ病の病原ウイルスはミナミキイロアザミウマに媒介される。ハウス開口部（サイド等）等に青色粘着トラップを設置し、ミナミキイロアザミウマの早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 発病株を認めたら速やかに除去し、ハウス外に持ち出して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。
- (ウ) 発病後は発生拡大を防ぐため、ミナミキイロアザミウマの密度を抑えるように薬剤防除を行う。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



2. トマト

(1) 疫病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

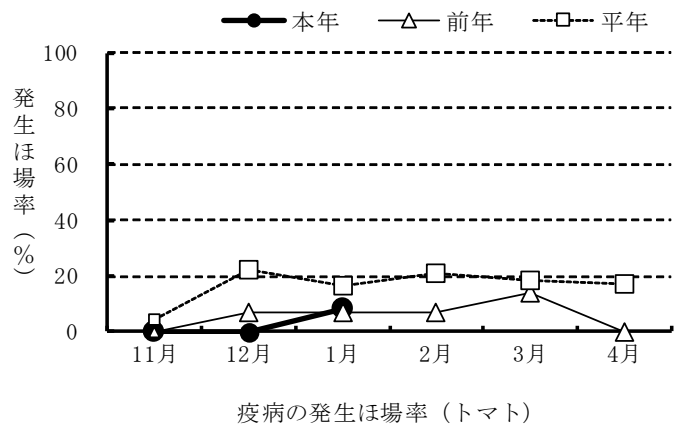
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率8%（平年16%）
：やや低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの通風換気を十分に行ない、過湿にならないよう努める。
- (イ) ハウス内の湿度が高く結露が多い場合は、強制的に加温を行い湿度低下を図る。
- (ウ) 発病すると急激にまん延しやすいので、発病茎葉は速やかにハウス外へ持ち出す。
- (エ) ハウスの谷部や北側等、結露し水滴の落ちやすいところで発生が多いので、早期発見し、初期防除に務める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



3. ピーマン

(1) 斑点病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

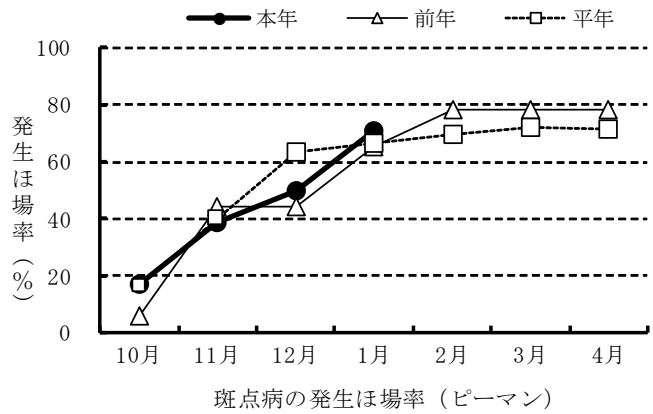
- (ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率71%（平年66%）：並

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 多湿条件下で発生しやすいので、ハウス内の通風換気に努める。
- (イ) 発病葉はできるだけ持ち出して処分し、菌密度の低下を図る。
- (ウ) 成り疲れなどによる草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (エ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

イ 予報の根拠

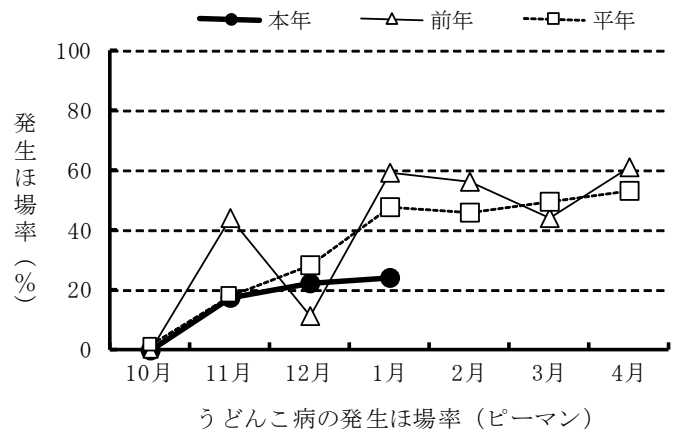
- (ア) 調査結果 発生量：少
発生ほ場率24%（平年47%）
：低い（-）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 成り疲れ等による草勢低下により発生しやすいので、適正な肥培管理に努める。
- (イ) 発病葉は早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (ウ) 多発すると防除が困難になるので、初期防除に努める。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 並

イ 予報の根拠

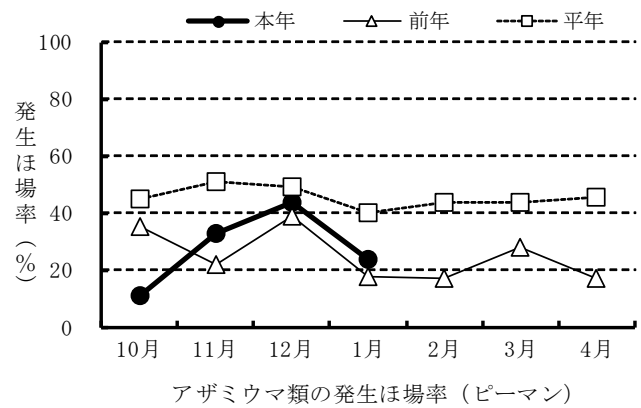
- (ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率24%（平年40%）
：やや低い（－）

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) ハウスの開口部（出入り口やサイド付近）等に青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) 花や新芽の中など、薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (ウ) 天敵を利用しているほ場では放飼後、チャノホコリダニやアブラムシ類の発生に注意し、発生時にはスポット散布など早めの対策を講じる。なお、防除を行う場合は、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。



4. イチゴ

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

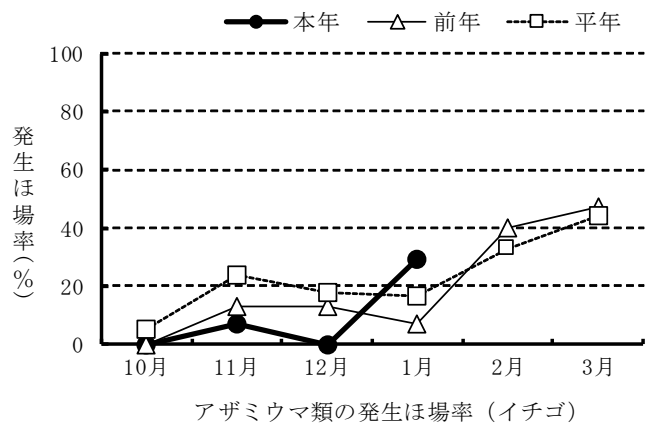
- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率29%（平年17%）
：やや高い（＋）

(イ) 気象予報

気温：高い（＋）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 主な発生種はヒラズハナアザミウマである。
- (イ) ハウス周辺及び内部の雑草は発生源になるので除草する。
- (ウ) 出入り口やサイドなどのハウス開口部から侵入することが多いので、防虫ネットを展張するとともに、青色粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (エ) 本虫は花の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。
- (オ) カブリダニ類等の天敵を放飼しているほ場では、天敵に影響の少ない薬剤を選択する。
- (カ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。



(2) ハダニ類

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 多

イ 予報の根拠

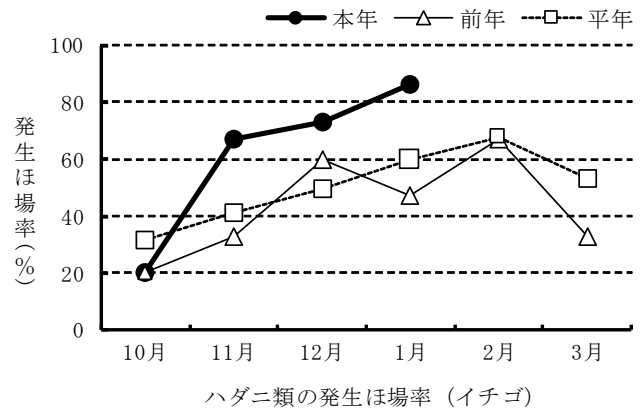
- (ア) 調査結果 発生量：多
発生ほ場率86%（平年60%）
：高い（+）

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 下葉や寄生葉は摘葉し、ほ場外に持ち出し処分する。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) カブリダニ等の天敵を放飼した場合は、天敵への影響を考慮した体系防除を行う。また、多発したほ場ではリセットを考慮した防除を行う。
- (カ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。



5. 施設野菜共通

(1) 菌核病 (令和2年度技術情報第14号(1月28日付け)参照)

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ, メロン,
トマト, ミニトマト,
ピーマン, ナス, イチゴ,
サヤインゲン
- (ウ) 発生量 多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率

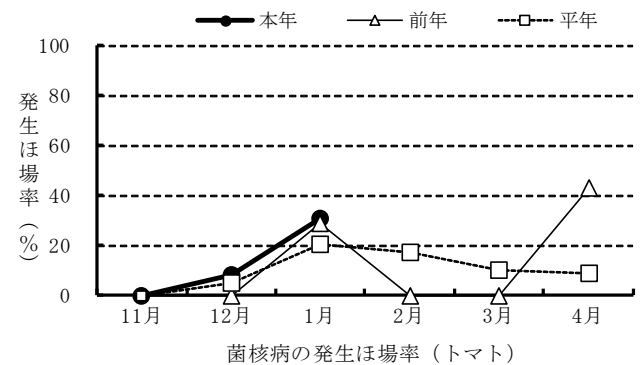
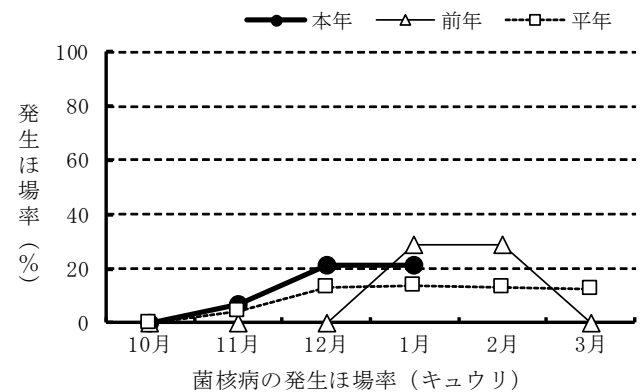
作物名	発生ほ場率 (%)		発生量
	本年	平年	
キュウリ	21	14	やや多
トマト	31	19	やや多
ピーマン	12	2	多
イチゴ	0	2	やや少

(イ) 気象予報

気温：高い（+）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 17～20℃前後の多湿条件で発生しやすく、今後好適条件が続くことが予想されるため、発病に注意し予防散布に努める。
- (イ) 病原菌は活力の衰えた花びらや枯葉、整枝後の傷口、枝分岐部付近から感染しやすいので、薬剤は対象部位へ十分かかる様に散布する。



- (ウ) 発病部位から健全部へ菌糸によって被害が広がるので、発病した花卉、枝葉、果実等は直ちに取り除き、ほ場外へ持ち出し処分する。
 - (エ) 発病株は周辺株や次作の伝染源となるので、菌核を生じないうちにほ場外に持ち出し処分する。
 - (オ) 適切な肥培管理により植物体が過繁茂にならないようにする。
 - (カ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。
-

防除に関する今月の留意事項

1. キュウリの植え替え作業時におけるアザミウマ類の防除について

キュウリのミナミキイロアザミウマは黄化えそ病（MYSV）の病原ウイルスを媒介する。

半促成作型での黄化えそ病の発生を未然に防ぐために、植え替え作業時における害虫防除を徹底する。

- (1) 抑制作型は収穫終了までの確な害虫防除を行う。
- (2) 収穫終了後は根を引き抜き株全体を枯死させる。
- (3) 中二重と外張りの間や谷下、暖房機の下などに生えている雑草は、ミナミキイロアザミウマの増殖源になるので引き抜きや除草剤散布などの雑草対策を徹底する。
- (4) 定植時は必ず薬剤処理を行う。

6. エンドウ類

(1) うどんこ病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率35% (平年19%)

: やや高い(+)

(イ) 気象予報

気温：高い (+)

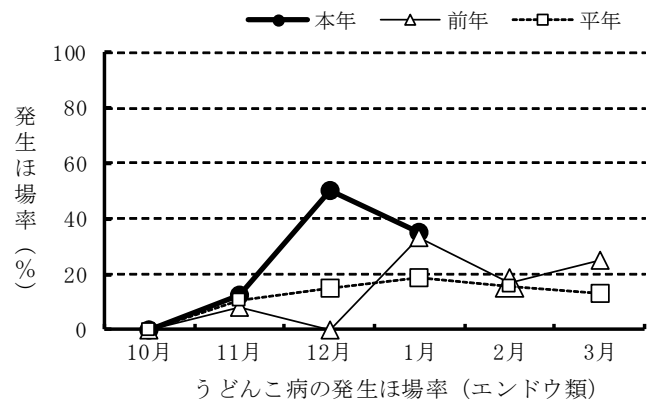
ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 莢にごま症を発生させ、商品性の低下につながる。多発すると防除が困難になるので、定期的な防除を行う。

(イ) 下位葉の葉裏から発生しやすいので、薬剤が十分かかるように散布する。

(ウ) 多発ほ場では5～7日おきに連続散布し、徹底した防除を行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布を行う。



(2) ハモグリバエ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率45% (平年37%) : 並

(イ) 気象予報

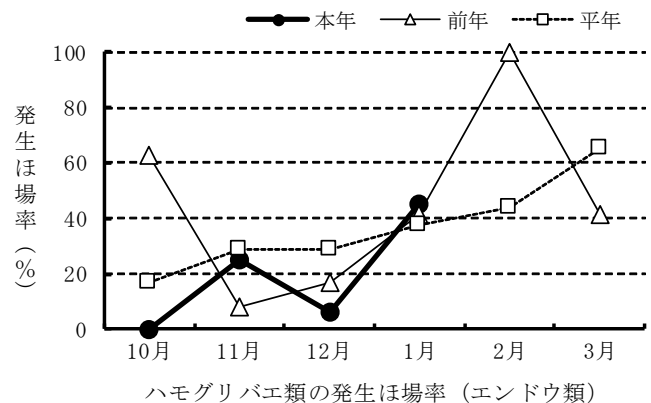
気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) これからの時期は主に葉裏側に潜行するナモグリバエが多くなるため、葉裏をよく観察し、早期発見に努める。

(イ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除に努める。薬液は葉裏にも十分かかるよう留意し、多発ほ場では5～7日おきの連続散布で徹底した防除を行う。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(3) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

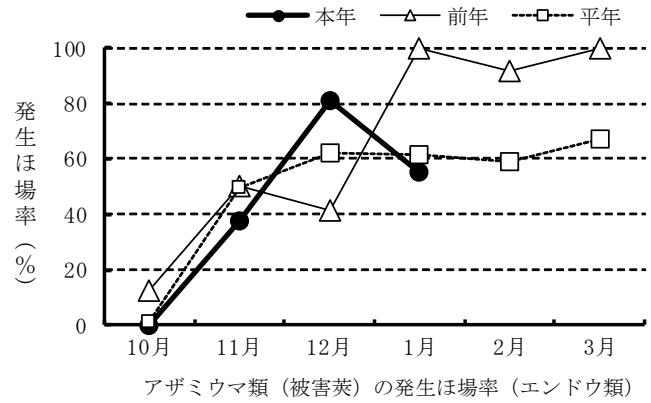
(ア) 調査結果 発生量：並
発生ほ場率55%(平成61%)：並

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) アザミウマ類は若莢に産卵し、「白ぶくれ莢」となるので、若莢の被害や青色粘着トラップへの誘殺から発生状況を把握し、早期防除に努める。
- (イ) 薬剤のかかりにくい花卉の奥や若莢に寄生するので、丁寧な薬剤散布に努める。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



7. バレイシヨ

(1) 疫病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 熊毛地域, 奄美地域

(イ) 発生量 熊毛地域：多
奄美地域：並

イ 予報の根拠

<熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多
発生ほ場率67%(平成12%)：高い(+)
発生程度は低い(-)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

<奄美地域>

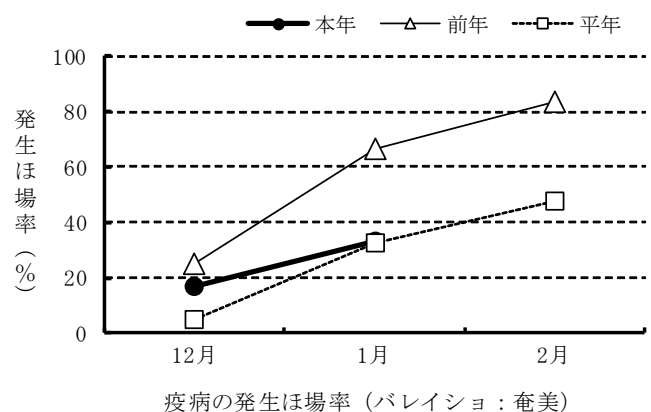
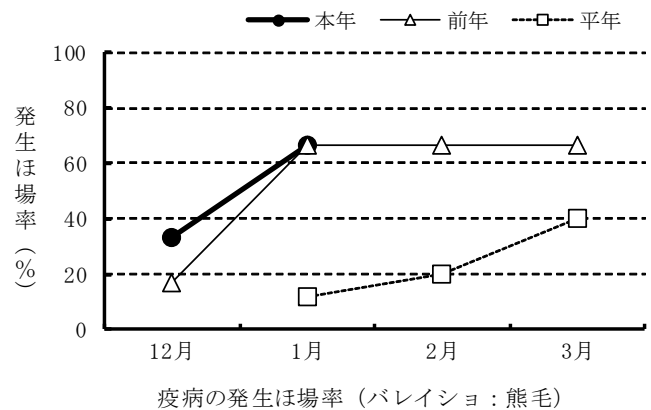
(ア) 調査結果 発生量：やや少
発生ほ場率33%(平成33%)：並
発生程度は低い(-)
強風による茎葉の折損が多い(+)

(イ) 気象予報

気温：高い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 降雨が数日続いた場合や、土壌水分が高い場合に発生しやすく、発病後は急速に病勢が進展するので、防除は予防散布に重点をおき、適期を逃さないように注意する。
- (イ) ほ場の見回りを行い、発生が認められたら直ちに防除を行う。その後は、進展状況に応じて7~10日後に追加散布を行う。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (エ) 収穫が遅れると被害拡大につながるため、適期収穫を行う。



(オ) 発病株は次年度の伝染源となるため、ほ場外に持ち出し適正に処分する。

(カ) 薬剤防除にあたっては令和元年度技術情報第5号(令和2年1月29日付け；ホームページ掲載)を参照。

(2) 軟腐病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 奄美地域

(イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率33% (平年15%)

：やや多 (+)

発生程度は低い (-)

強風による茎葉の折損が多い (+)

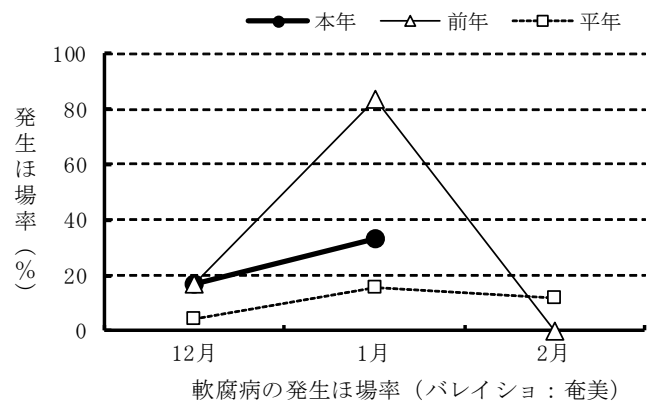
(イ) 気象予報

気温：高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 土中で生存する病原細菌が茎葉、塊茎の傷口から侵入する。風傷み等付傷があり、高温多湿条件が続く場合は発病に注意し、早期防除に努める。前年度発生ほ場では特に注意する。

(イ) 収穫終了後の残渣は適正に処分する。特にくずイモ等の発病残渣をほ場に残さない。



防除に関する今月の留意事項

1. 収穫終了後の残渣処理について

露地野菜等の残渣は、菌核病や軟腐病をはじめ、次作に対して様々な病虫害の伝染源(発生源)となるので、長期間放置してほ場の病原菌密度や虫数を増加させないように、収穫終了後はできるだけ速やかに残渣処理を行う。

(1) 発病茎葉・果実を含め、収穫後の残渣は、ほ場外に持ち出し、適切に処分する。

(2) ほ場外への残渣持ち出しが困難なほ場では、複数回の耕耘により残渣を早めにすき込み分解を促す。

農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り、記載された用途、方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて、適切な防除衣、保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり、流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は、住宅地および畜舎に隣接するほ場や、無風の時、土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので、施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬、不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し、鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は、前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は、各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は、巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は、果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（＋）、（－）は、発生量の増加、減少要因を示す。
- 気象予報は、向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い、本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし、過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。